

「身近な図書館づくりプロジェクト」（市民活動団体提案協働事業）
（中央図書館）

Q 単年度事業にも関わらず「協力関係を作っていく」、「今後も継続していく」とおっしゃっていたが、具体的にはどのように継続していくのか。

A （中央図書館）「身近な図書館を地域の方々がより利用しやすくするための地域間親交」という考え方は、第二次鎌倉市図書館サービス計画でも謳われており、継続して取り組んでいく予定である。次年度以降も引き続き玉縄地域での事業継続を考えている。また、玉縄・腰越地域以外でも事業実施を考えている。図書館では市民協働事業としてのスタッフ人件費等を予算化するつもりはない。地域の市民に図書館の役割を知っていただいたり、図書館の資料を生活の中で役立てていただいたり等の事業は予算を伴わずに積極的に推進していきたい。単年度事業として、1年間で提案団体と事業内容の検討を進め、協力体制を作っていくのが1番の肝だった。今後、他団体のお力を借りる際もこの方法を活用していきたい。

（団体）例えば、今回の『玉縄歴史の会』の皆さんは玉縄の歴史を半世紀以上に渡って研究をされている会だが、玉縄図書館への親しみをあまりお持ちではなかった。協働事業で団体が仲立ちをすることで玉縄図書館に親しみを持っていただいた。その結果、今までご自身で保存されてきた貴重な写真資料を何点か玉縄図書館に寄付していただいている。また、今後も協力していただける旨を聞いている。人と公共を結び付けたことに私達の役割があったと考えている。今後もこの関係は継続されていくだろう。協働事業を通して図書館職員が信頼を勝ち取ったことが最重要である。職員の力をソフトとして更に拡充していく必要がある。

Q 今回の協働事業は、玉縄地域と腰越地域でそれぞれ団体と連携するのが目的だった。「身近な図書館」とおっしゃっていたが、利用者数を増やすのならば活動後の利用者増加数が目標及び評価となる。

もう1つ、「今まで無かった情報を取り込めた」とあったが、具体的にどういった情報をどれくらい取り込めたのか示していただきたい。

A （中央図書館）登録者数や利用者数は資料に表として載せている。字別の登録者数を出している。例えば、玉縄や大船の統計ではないが、津・関谷・城廻は登録率が40%を下回っている。こうした地域の登録率が低い原因は、図書館との物理的な距離や生活する中での親しみの無さに関係している。このように、図書館からのPR等が行き渡っていない地域もあるが、今回の協働事業がそうした地域の成果に繋がると考えている。また、貸出率や登録率の他に、身近な図書館プロジェクトを進めていく上での統計資料を考えていきたい。

（団体）新たに得られた情報については、パネルでご説明する。例えば、玉縄地区だと昭和29年の大船フラワーセンターの航空写真や、清泉女学院が出来る頃の航空写真等を、『玉縄歴史の会』に図書館のためならということでご提供いただいた。パネルとして保存する許可もいただき、貸出も可能となった。

腰越地区では、広町の緑地周辺の変遷が分かる1961年と1967年の写真資料を『広町を残す会』にご提供いただいた。腰越図書館の所蔵する郷土資料として保存するだけではなく、学校や自治会への貸出を考えている。

Q 図書館や本を身近に感じてもらうことを目的として、ハード面・ソフト面・イベント・協働

の充実や増加を図っていた事業だと理解した。協働事業を行った中で目的を達するために更に注目すべきだと感じた点等、フィードバックがあれば教えていただきたい。

大和市の図書館は年間300万人に利用者されたと聞く。コンセプトを「居場所づくり」とし、自習スペースを増やしたそうである。大和市の場合、一点に注力して取り組んでいる。協働事業では資料を増やしたり利便性をはかったり多面的な取り組みをされているが、これから注力して取り組みたいポイントがあれば教えていただきたい。

- A (団体) 大和市の図書館は見学もしており、素晴らしいと感じている。一方で、郷土資料や貴重な資料は充実していないとも聞いている。大和市は図書館計画が無い中、トップダウンで文化創造拠点シリウスを建ててしまった為に課題が多いとのことだった。このことから、大きな図書館を作るよりも、あらゆる市民が歩いて通えるような地域に密着した図書館があることがどれほど素晴らしいか検証されたと考えている。

公益社団法人日本図書館協会が「中学校区に1つの図書館があるのが良い」としているので、ハードとしては今ある4つの中学校区での図書館を活用し、ソフトでは貸出サービス等を充実していきたいと考えている。

(中央図書館) 今まで地元の図書館を利用されていなかった方に、想像以上に活用できると思っていただけたことが大きかった。図書館を一方的に利用するだけでなく、地元の方が図書館を利用して自ら発信できたことが最も特徴的で、そうした鎌倉ならではの強みをこれから伸ばしていきたい。

- Q 市民団体が仲立ちとなり公共を市民と繋げるという協働の肝の部分に取り組んでいただいております、非常に意義深い。玉縄地区と腰越地区での協働事業をモデルケースとし、他地域の図書館のこれからの事業に繋がっていくように、このモデルケースを共有していただきたい。その考えはあるのか。

- A (中央図書館) おっしゃるように進めていきたいと考えている。鎌倉市には5つの図書館があるが、規模に大きな差はない。それぞれの地域でそれぞれの図書館を育てていただきたい。

- Q 図書館が遠い市民への対応策として、車での貸出や小学校を拠点とした貸出等の構想があるが、市民目線に立って市民意見を代弁していただきながら、身近な図書館づくりが出来ると良いと思う。是非、活動を継続して欲しい。

- A (団体) 図書館はこの活動を継続すると明言している。私共も仲立ちをしていくが、人件費や活動費がかかる為に予算が全く無い状態での活動は厳しく、スピードダウンしてしまうだろう。協働事業費として1年間で30万円費やしたが、その1割でも2割でも良いので「身近な図書館プロジェクト」に予算をいただくようなインセンティブが、この協働事業を更に成長させていく上では肝要だと考えている。

- Q 利用者や参加者の数が示されているが、はじめて利用するきっかけになった等、利用促進の数値はお持ちだろうか。アンケートで高評価をいただいていることは存じている。数値的な変化を教えていただきたい。

- A (団体) 貸出数の数値はある。例えば、腰越図書館では自然体験と図書館体験を組み合わせる協働事業を行なった結果、自然科学分野の貸出数が前年度比で大人向け図書は16%、児童向け図書は13%増加している。玉縄図書館の数値はまだいただけていないが、これから分析したら必ず数値は出てくるだろう。